

球児の「夢」

「かけがえのない経験」に寄り添う
— 埼玉県の高校野球審判員として —

野澤 良介
(カスタマーリレーション部
グローバルサービス課)

高校野球の聖地ともいえる甲子園。その甲子園で行われる全国高等学校野球選手権大会出場への切符をかけて、各都道府県の高校球児たちが競う。

新型コロナウイルス(COVID-19)による影響で2年ぶりの開催となった2021年夏の全国高等学校野球選手権 埼玉大会の試合会場には、球審として選手とともに汗を流す野澤 良介の雄姿があった。「JQA人のオフタイム」第2回は、高校野球審判員にかける野澤の思いに迫った。

高校時代の経験が審判員を志すきっかけに

野澤は、小学校・中学校・高校と野球を続けてきた。高校では、内野・外野をこなすユーティリティプレイヤーとして試合に出場するかたわら、自らが出場しない練習試合では審判をつとめた。

「常に試合に参加したかった私にとって、選手だけでなく審判員としてもグラウンドに立てることは魅力的でした。また正確なジャッジのためには、一球ごとに起こり得るプレーを想定する必要があり、そこに楽しさを感じました」と当時を振り返る。

大学進学後は同好会で野球を続け、JQAに入構後も野球部に入った。その頃から「高校野球の審判員をやってみよう」という思いが強くなり、自身が暮らしている埼玉県の高校野球連盟に審判員になりたいことを伝えると、幸いにして高校野球の経験を買われて登録がかなった。

審判員デビューは、2011年秋の練習試合である。「最初は、初級者にとって覚える動きの数が少ない3塁塁審を担当しました。その後、講習会に参加し、経験を積んで、翌年3月に練習試合で球審をつとめました。練習試合とはいえ、緊張しました」。

公式戦デビューは、社会人2年目の2012年4月の春季大会。「3塁塁審として、スコアボードに自分の名前が掲げられているのを見て、身の引き締まる思いがしました」と語る。

高校野球審判員は「グラウンド・ティーチャー」

高校野球の審判員には、どんな資格があるのだろうか。

「私はアマチュア野球公認審判員^(*)2級を取得していますが、高校野球審判員としての資格は特にありません。ただし、高校野球審判員には審判技術だけでなく、『グラウンド・ティーチャー』、つまり、学校教育の一環としての指導力が求められます。選手が礼儀、尊敬、フェアプレー精神などを身につけることに主眼が置かれています。さらに、試合の安全な運営も重要です。そうした役割を果たすとともに、私は、選手たちの晴れの舞台にふさわしい正確かつ毅然としたジャッジを心掛けています」



2021年秋季大会のグラウンドに立つ野澤

目標はアマチュア野球公認審判員1級を取得し、
県で活躍する審判員の技術向上に貢献すること

各都道府県で行われる高校野球の公式戦は、秋

季大会、春季大会、夏の選手権大会^(※2)である。秋の優秀校は地区大会を経て春のセンバツ甲子園につながり、夏に優勝すれば夏の甲子園が待っている。

野澤は、1つの大会で約10試合の審判員をつとめる。ウィークデーの試合も多いため、有給休暇を取得することもあるが、「職場の理解、同僚の協力があって初めてできることで、本当に感謝しています。また、大会期間外の週末も練習試合の審判員を引き受けることが多いので、理解ある家族にも感謝しています」。

なぜ、そこまでして審判員を続けるのか。

「グラウンドに立てる喜び、好きだということにつきますね。今後の目標は、アマチュア野球公認審判員1級を取得し、自身の技術を向上させていくことはもちろんのこと、埼玉県で活躍している審判員の皆さまの技術向上に貢献することです。そのために甲子園の土の上に立ってみたいと願っています」甲子園で開催される全国大会には、各都道府県から審判員が派遣される。埼玉県からも3～4年に1名派遣される。この派遣制度は個々の審判技術の向上だけでなく、甲子園での経験を持ち帰って各地域の審判員のレベルアップにつなげることも大きな目的の一つだ。

「高校野球は3年間しかなく、3年生にとっては夏の大会が最後です。関係者の皆さんの尽力で大会が開催できたからこそ、選手たちはかけがえのない経験を得ることができました。そんな選手たちの真剣な勝負に立ち会えることが、審判員としての最大の醍醐味だと思っています」



野澤のアマチュア野球公認審判員2級のライセンスカード。今後の目標は、アマチュア野球公認審判員1級を取得することだ。

(※1) アマチュア野球公認審判員

一般財団法人全日本野球協会の「アマチュア野球規則委員会による公認審判員の資格制度」(公認審判員ライセンス制度)に基づく。国際審判員、1級審判員、2級審判員、3級審判員があり、国際および1級はアマチュア野球規則委員会、2級、3級は各都道府県の審判員組織が認定。

(※2) 高校野球の公式戦(都道府県大会)

秋季大会：新チームで臨む最初の大会。優秀校は関東大会・近畿大会などの地区大会に出場、好成績をおさめれば、選抜高等学校野球大会(センバツ甲子園)に選ばれる。

春季大会：新一年生も交えて冬に鍛えた成果を競う。夏の大会のシード権につながる。

夏の選手権大会：全国高等学校野球選手権大会出場をかけた大会。

■ 野澤審判員のある一日

5:00 起床

前日は早めに就寝。大会期間中は飲酒を控える

6:00 出発

会場へのアクセスが良ければ時間に正確な電車を使う
遠方の会場の場合、前泊することも

7:30 球場集合

球場責任審判員よりスケジュール、グラウンドルールや指導事項などの確認
審判団は、1試合につき球審、塁審3名、控え審の5名で構成

8:15 両チーム主将など集合

メンバー表交換
先攻後攻決め(ジャンケン)
天候、グラウンドルールなどにかかわる注意事項を両チーム主将に伝える

8:30 用具の点検

バット、ヘルメット、キャッチャー防具などの安全点検
野澤のルーティンは、鏡の前で服装やジャッジのジェスチャーをチェックすること

8:40 試合前の打ち合わせ

4人の審判員の連携・分担を確認
各審判員の打球判定にかかわるテリトリーなどを取り決める
カメラマン席をはじめボールデッドゾーンの状況などもチェック

9:00 第一試合開始

「集合」の声かけを合図に両チームを集める
「礼に始まり、礼に終わる」が基本、タイミングを合わせて挨拶
グラウンド、スタンドの隅々まで見渡して、プレイボールを宣言
「サイレンが鳴ると、身が引き締まる」

選手やランナーコーチに注意し、心配な選手、怪我をした選手が生じた場合には治療時間などを十分に取る
雷や豪雨などについては、大会本部と連携して迅速に中断などを判断する

11:00 試合終了

反省会。試合を振り返りチェック
必要事項を次の試合の審判団に伝達
「以前は、一度ジャッジを下したら変えないことが基本でした。しかし、昨今は明らかにジャッジが間違いと判断されるケースについては、協議のうえ、勇気をもって裁定を覆す場合もあります。誰もが納得する答えをその試合の担当審判員ワンチームで慎重に導き出していくことも求められます」

12:00 第二試合開始

出場しない試合でも、ネット裏の審判席で必ず見守る

15:00 第三試合開始

2塁塁審としてグラウンドに立つ

17:00 日程終了

大きな問題も起こらず、一日をやりとげた満足感で帰宅

